

『蜀中九日』 王勃

唐詩の幕あけ

漢詩の近体詩形は初唐の末期（王勃の頃）によく定まった。七言絶句は五言絶句より後に発達した。初唐の詩は平仄に捉われず、詩語の置き方で流暢さや面白みを重視し、内容を充実させた。盛唐には七言絶句の平仄関係が、二四不同、二六同、一三五不論、下三連を除く、孤平（第四字目）を禁ず、第一句第二句第四句末に押韻する等の近体詩形が確立された。

生没年の異説

王勃（字は子安）は六四九年―六七六年の人で二十八歳で没した。山西省河津県絳州龍門の人である。ところが王勃の生没には六四八年―六七五年という説もある。王勃の作品にみられる紀年表記から逆算すれば生年がくい違うとか、彼が蜀に客遊していた期間が二年説や三年説で、蜀に行った年に「吾之有生、二十載矣」（吾之に生有り、二十

載たり）つまり総章二年（六六九年）と詩序に記されているので、生年が正しくないという説もある（記されているのは数え年である）が、王勃の親友である楊炯の「王勃集序」には、六四九年生まれと記されていることもあり、六四九年―六七六年が多数の学者の説である。よって本会テキストもこの説に従っている。

初唐の四傑の第一

王勃は初唐に生まれた。我国の大化の改新の四年後である。盛唐の詩の全盛期即ち、李白、杜甫、王維、高適、等々の以前である。父は官吏王福時、祖父は隋末の儒家王通である。六歳で文辞をよくし、九歳の時古書を読み、誤ちを指摘して神童といわれた。年若くして朝散郎（実際の職務はなく、位階だけを示す官名、従七品にあたる位）を授けられた。後、沛王の府の修撰（書物を編集する官）になった。天才詩人として名声高く、楊炯、盧照鄰、駱賓王と共に初唐の四傑といわれている。しかもその第一位である楊炯とは親友で、王勃の伝記資料となる「王勃集序」を記している。初唐の末期頃諸王の間でよく鬪鶏が行われていた。王勃は鬪鶏を激する戯文を書いたので、高宗の怒りにふれ職を解かれた。その後長安を出、蜀に二年―三年客遊した。父も王勃の罪に連座して交趾（現在のベトナム北部）の県令に左遷された。王勃がその父を訪ねる途中、南海に落ち

溺死した。遺体は南方に葬られ、遠く離れた親友には死亡通知も遅れたという。

その後若干年が経過し、故郷に移葬されたという。

望郷の詩

この詩は王勃が、鬪鶏を檄する戯文を書いて免職になった後、蜀へ客遊したときの作。丁度九月九日の重陽の日に蜀の東部の望郷台に登り、他人の送別の宴に出くわして詠まれた詩である。送別されるのは友人の邵大震しょうたいしんだったという説もある。

蜀中九日 王勃

九月九日望郷臺 九月九日望郷臺

他席他郷送客杯 他席他郷客を送るの杯

人情已厭南中苦 人情已に厭う南中の苦

鴻雁那従北地来 鴻雁那ぞ北地従り来る

九月九日、重陽の節句に小高い山に登り、菊酒きくしゅを飲んで邪気を払う慣わしにより、自分

もこの望郷台に登ってみた。他郷において、しかも他人の宴席で旅立つ人を送る場面に出くわし、さらにこの山が望郷台という名でもあり、故郷を想う心が一入増ひとしおしてくるのである。



私の心は、この蜀の土地での毎日の暮らしにいや気がさしているのに、あの空を飛んでくる雁は、北の地を捨てて何故この地に飛んでくるのであろうか。

蜀にいて沸沸と望郷の想いを詠んだ詩である。

鑑賞

初唐の近体詩形が確立する当時の詩である。仄起七言絶句であり、韻は上平声十灰の韻を踏んでいるが、起、承は平仄が整っていない。つまり「日」は本来平字でなければならぬのに仄字になっている。また「席」も同様である。「郷」も規定外れである。このように平仄は原則通りではないが、それよりも、「九月九日」や「他席他郷」のようにたたみ込み風のリズムを用い、詩語の流暢さが重んじられている。さらに対句表現が効果的に加わってみごとな起承句となっている。この手法で実によく重陽の節句の日、身は他郷にある淋しさを表現している。転結も対句（人情と鴻雁、已厭と那従、南中苦と北地東）になっている。南中（蜀）の日々の暮らしがつらくていやになっている身が、北から渡ってくる雁を詠んで、王勃の言外の情を表わしている格調の高さがある。王勃がいかに望郷の念にあふれていたかを、読む者は推しはかることの出来る名詩である。

尚、書物により転結を対句とみなさないという説もある。